

Chapter 2

Case Studies

学習意欲・学力向上を目指した多彩な授業実践例

実践事例.01

グループ学習の全校導入4年目。
「わかること」をあきらめなくなり
成績が底上げした

滋賀県立草津高校

聞き、書くだけの授業では
「生徒がかわいそう」

08年に当時の教頭が授業をひととおり見て、「この授業では生徒がかわいそうですね」と職員室でつぶやいた。その疑問が授業改革に乗り出すきっかけとなった。

「かわいそう」といつても、「ひどい」授業だったわけではない。行われていたのは従来型の授業。教員が説明をしながら板書をする。生徒は話を聞きながらノートに写す。けれどもそのような授業で、生徒の「意欲」が育つのだろうか？それが教頭

からの問題提起だった。

09年に授業力向上委員会が立ち上がる。新任校長の提案でいくつかの先進校を視察することになり、広島県の安西高校や祇園東中学校などに委員会メンバーを中心とした教員が見学。大きな収穫があった。

「本当にすばらしい取り組みだと感じました。生徒が真剣に『学んでいる』という『高め合っている』というか、言葉で表現するのは難しいですが、教室や学校の雰囲気、が他校とまったく違い、とても驚きました」
(教務課主任 寺田雅子先生)

校長
森野邦彦先生



教頭
長井和子先生



教務課主任(学び担当)
寺田雅子先生



教務課(学び担当)
赤澤寿男先生



「学びの共同体」のメソッドを
全面的に導入

それらの学校は「学びの共同体」という全国的な研究会に属しており、グループ学習をうまく取り入れていた。見学した教員がすぐさまグループ学習を試してみると、それまでは騒いだり上の空だった生徒が、しゃきっと授業に参加するようになった。「グループ学習って、もしかしたらすごいんじゃない?」。教員たちのかすかな手応えと期待感から、10年度より全校的に導入することが決まった。

「学びの共同体」のメソッドでは「机の配置」が重視され、基本形が2つある(図1)。ひとつは「コの字」型。生徒の机が黒板に向かうのではなく、教室の中心に向かうようなかたちだ。もうひとつは男女市松模様を基本とする「グループ」型。生徒が4人ずつ向き合ってグループになるかたちである。この2つの型を授業のなかで使い分けていく。

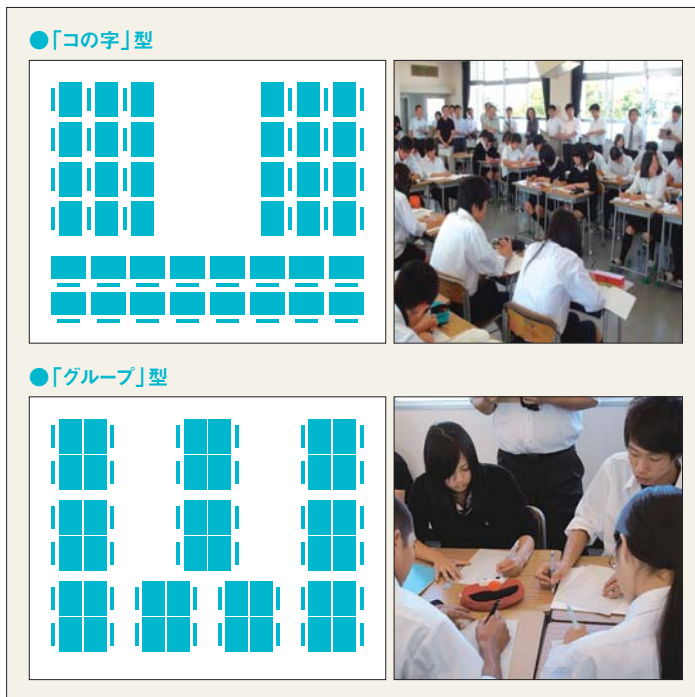
草津高校は10年度から、朝のHRの時点から机をコの字の向きに変えた。「どうしてそうしなければならないのか…」といった教員からの反発も少なくなかった。し

School Data

1922年創立／普通科／生徒数699人(男子256人・女子443人)／進路状況(2012年度実績)大学32.3%・短大10.2%・専門学校39.8%・就職11.9%・その他5.8%

取材・文／荒尾貴正

図1 基本的な机の配置



授業の導入は「コ」型で始まり、グループ学習の際は「グループ」型になる。途中で全体説明に戻る際、ていねいに説明したい時は「コ」に戻すが、短い説明の時はそのままの場合が多い。「コ」型と「グループ」型それぞれの座席表があり、床にポイント（目印）が貼ってある。写真は12年度の研究授業（数学）の様子

かし、やらざるを得ない状況をつくらなければ何事も変わらないという信念でこの形式を押し進めていった。朝は「コ」型で始めること。各授業も「コ」型で始め、授業のなかで一度はグループ学習を取り入れること。そのような取り決めで授業改革がスタートしていった。

ところで、なぜ「コ」型なのか？

「生徒が発言する時、教師に対してではなく、生徒みんなに向かって話すかたちなので、ディスカッションが成立しやすいのです。さらに反応も伝染しやすい。例えば、教員が難しい問題を投げかけた時、誰か一人がわかったような顔を見ると、『自分に

もわかるかもしれない』という気持ちになります。他人の頑張りも伝わりやすいですが、逆に怠けている生徒がいると、そういう空気も伝わってしまいますね（寺田先生）

**講義は短く
グループ学習を十分に**

草津高校における基本的な授業の流れは次の通りだ。まずは「コ」型のスタイルで、教員の講義から始める。目安は7分間。それが「生徒の集中力の限界」であるという学説を元にしていて、あくまでも目安であつてルールではない。講義→グループ学

習→講義→グループ学習というふうに、50分授業の中にできれば2回グループ学習を取り入れることを理想としている。確認テストを入れる決まりはない。最後は、必ずしも「結論」を出さなくていい。結論がわからなくて「すっきりしない」気持ちをもち続けてくれたら、それも学習動機になり得るからだ。

その点、授業の最後より、始まりを大切にすることが推奨されている。当初より授業改革の中心メンバーとして活動している教務課の赤澤寿男先生は、次のように語る。「どんな生徒も基本的には『わかりたい』と思つて授業に臨みます。そういう生徒を最初に引き付けられるかどうか、それが授業の成否に大きく関わると考えています。私が特に気をつけているのは、話す内容より声のトーン。どんな状況でも声を張り上げず、低く抑える。教師の声が落ち着いていると、落ち着いた雰囲気です。授業をスタートできます」

**「ねえ、教えて」が合言葉。
生徒が生徒に教える姿に感動**

では実際に生徒の学びはどう変化したのだろうか。

「本校では、『ねえ、教えて』を生徒の合言葉にしています。そのためわかる子がわからない子に教えるという光景が教室のあちこちで見られます。限られたポキヤプラーを最大限に使い、独特の言い回しで言

葉を重ねていって、懸命に友達に教えている姿は何ともかわいらしく、上手に教えるなあと、いつ見ても感心します。大人の言葉で教えられるよりも、この子たちにはこのほうがわかりやすいのだからと思つています（寺田先生）

「以前ならば机に突っ伏していたような生徒も積極的に学び合い、『なるほど！』『そういうことか！』と声を上げるのが普通のことになりました。かつては想像もしなかった、すごい変化です。授業って本来、わからなかったことがわかるようになる場だったと改めて気づかせてもらっています」（赤澤先生）

成績の底上げは早かった。グループ学習でなければ落ちこぼれていたと思われる生徒たち、言い換えれば、これまではわからないことを早々にあきらめていた層が確実に減り、全体の成績は上がった。「学びの共同体」の学校の多くも同様に成績の底上げは早いというが、その後2段階ロケットのように、上のロケットが飛び出す時が来るといわれる。草津高校は今か今かとそれを待っている状態だといふ。

思わぬ生徒が脚光を浴びるのもこの学び方の特長だ。普段は目立たない生徒が、ある日グループのなかで活躍。みんなにほめられて気を良くし、突如としてリーダーシップを取り始めるようなケースがどのクラスでも起きています。この授業に対する生徒たちの評価も全般に高いことが、アンケート結果からうかがえる（図2）。

学習意欲を高め学力につなげる授業改革

chapter.2: 学習意欲・学力向上を目指した多彩な授業実践例

図2 生徒に対する授業アンケート結果 (2012年)

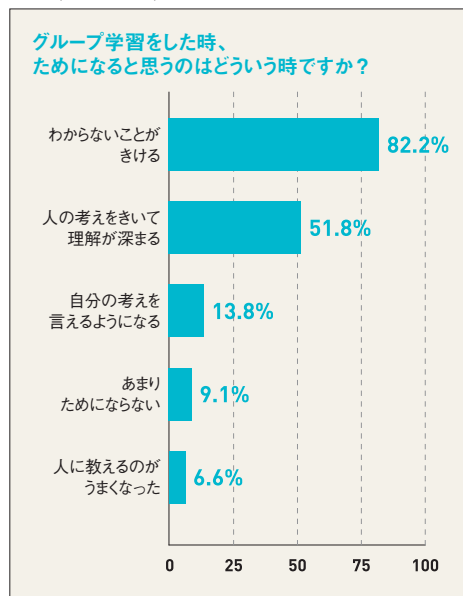


図3 草津高校の授業メソッドの概略 (新任者用レジュメから抜粋)

- 1 学習環境整備について
 - ポイントに合わせ、机間に隙間をつくらないこと
 - 机上整理について、毎授業開始時に注意・喚起すること
 - ロッカーの上の私物を整理させること
 - スッキリ・清楚な黒板を維持すること
 - 失敗、間違いを受け入れられる授業の雰囲気づくりと仲間関係づくりに努めること
- 2 見通し
 - 視覚による提示で授業の流れを伝えること
 - 提示は科目担当者が生徒に理解できる「手法」とする
- 3 学ぶ姿勢
 - 授業の主役が自分である意識を高めること
 - 「教えて」「なぜ」と言える自分をつくること
 - 高いレベルの課題設定により、意欲的な学習姿勢を養うこと
 - 穏やかな教室で、夢になれる授業づくり

図4 年間公開授業日程 (2013年度)

- 全体公開研修 (研究授業・研究協議)
- 保健体育 6月13日(木)
＜アドバイザー＞副島孝先生 (前小牧市教育長)
 - 理科 11月12日(火)
＜アドバイザー＞大黒孝文先生 (同志社女子大学)
- 教科を核とする公開小グループ研修 (研究授業・研究協議)
- 国語 6月3日(月)
＜アドバイザー＞和田節子先生 (共栄大学)
 - 社会 10月3日(木)
＜アドバイザー＞副島孝先生 (前小牧市教育長)
 - 英語 11月18日(月)
＜アドバイザー＞江利川春雄先生 (和歌山大学)
 - 数学 2014.1月22日(水)
＜アドバイザー＞岡部恭幸先生 (神戸大学)

※草津高校のホームページには、公開授業日程などについての記載があります。ご覧ください

教員にマニュアルはなく 公開授業で学び合う

教員も変化し、進化している。しかし、その度合いは教員によって差がある。グループ学習の取り組みやすさについて教科による違いはなく、個人の取り組み方で差が生じているのではないかと。

「これまでに積み上げた授業手法を思い切ってスクラップし、新たに組み立てていくことは誰しも難しく、私も十分とは言えません。しかし、それができる教員はものすごく進化します。授業では課題設定がひとつのポイントで、生徒を知り尽くすほど良い課題がつくれるのですが、それを徹底的に行って、クラス全体が引き込まれていくような深い学びを実現する教員が出てきています」(寺田先生)

課題設定や教え方についてのマニュアルはない。新任者用に簡単なレジュメがある

だけで(図3)、公開授業を年に何度も行い、教員同士が学び合うことを基本にしている。学校全体の公開小グループ研修会が年一回、教科ごとの公開小グループ研修会が年一回ずつ行われ、各会に必ず大学教授等のアドバイザーを招き、他校の教員の参加も歓迎している(図4)。

こうして10年度から始めた授業改革は、今年で4年目を迎えた。11年度からは授業力向上をテーマにした県の指定事業に採択され、今年度がその最終年度である。

当初は反対者もいたが、現在は大半の教員がグループ学習を取り入れるようになったという。今年度着任した管理職の目には、同校の取り組みはどのように映っているのだろう。

「多くの高校が授業改善に取り組んでいると思いますが、本校では『型』を導入し、全員でそのやり方を学ぼうとしている」と

実践のポイント

机間に隙間をつくらない。これが意外に重要だ

グループ学習を導入しようとしている高校にアドバイスをお願いします

自分の授業にグループ学習を取り入れた当初、まったくうまくいきませんでした。「何でグループにしなきゃいけないの?」と

ころが画期的だと思っています。中心となっている先生方は授業力向上に向けて頑張っていますので、私も応援したいと思っています」(長井和子教頭)

「本校のグループ学習を最初に見たとき、生徒の食いつきが良くて驚きました。指定が終わる今年度のうちに、さらに盤石の体制を整えたいと考えています」(森野邦彦校長)

「グループ学習をする生徒が遊んでしまふんじゃないか? そう心配される先生が多いと思いますが、私も最初はそうでした。でも生徒は、本当にわかりたいと思つたら、ちゃんとグループで学んでいます。実際にやってみて、それに気が付きました。ですから、ぜひみなさん勇気をもって始めていただきたいと思えますね(寺田先生)」

グループ学習をする生徒が遊んでしまふんじゃないか? そう心配される先生が多いと思いますが、私も最初はそうでした。でも生徒は、本当にわかりたいと思つたら、ちゃんとグループで学んでいます。実際にやってみて、それに気が付きました。ですから、ぜひみなさん勇気をもって始めていただきたいと思えますね(寺田先生)」